



戦国姫

せんごくひめレジェンド

LEGEND

BEST
SELECTION

成年
コミック



戦国姫

LEGEND

BEST
SELECTION

お市の方

記念すべき1回目は：戦国一の美女と呼ばれる「お市の方」をチョイスです☆

お市は、ご存じの通り戦国の霸王・織田信長の実の妹。そして信長と言えば「尾張の大うつけ」が代名詞となっていますが、それは他国からの評判で：国内では「たわけもの」と呼ばれていたそうです。

コレは「田分け者」と書いて「近親相姦」の隠語だったそうです(笑)。

信長には二十人以上の実子がいるながら、正妻・濃姫(帰蝶)との間に子供が居ないのは有名なのですが、妹・お市が年頃になる頃には織田家の正史から濃姫の記述が消えてくることから、信長とお市の妖しい関係が妄想されます。

さて、そのお市が浅井家に嫁いだのは21歳の時：当時の武家の娘は遅くとも15歳くらいまでには嫁に出ていた事を考えると、かなり晩婚と言えこれがまた兄・信長との禁断の噂の発端になっています。

お市は浅井長政との間に、大河ドラマでも有名な「浅井三姉妹」を含め5人の子を授かり、側室を迎えなかったことでおしどり夫婦として語られる事が多いようですが、長政自身は、政略結婚としてお市を迎えたはずなのに、彼女の美貌と信長仕込みの「床上手」にゾッコンになってしまったのではと妄想させてくれます(笑)。

その後、織田家の朝倉侵攻に際し、同盟関係にあった浅井家は信長に叛旗を翻して挟み撃ちにしようとしてみますが、お市は「小豆を入れた袋の両端を縛ったモノ」を陣中見舞として兄・信長に送ることによって夫婦睦まじいハズの夫・長政の裏切りを兄・信長に伝えるという謎の行動をおこしてたりします。そして小谷落城の後(長政の嘆願によって三姉妹を守る為落ち延びたとか、秀吉が決死の作戦で救ったといった様々な逸話がありますが…)大名の正妻でありながら出家することなく、清洲城で信長の手厚い保護を受けその生活はとても優雅だったという記録もあったりして：兄妹の妖しい関係が根強く噂されているのです。

いやいやネタは尽きないお姫様ではありますが、今宵はここまで。



千姫

さてさて今回は、戦国時代末期：世が豊臣から徳川へと移る中で、時代の荒波に翻弄された薄幸の姫君・千姫にスポットを当ててみたいと思います。

徳川二代将軍・秀忠と大河ドラマで話題の浅井三姉妹の三女・お江との間に生まれたのが「千姫」で：教科書的に言えば「大御所」と呼ばれている徳川家康の孫であり、「戦国の霸王」と呼ばれた織田信長の実妹・お市の方の孫である戦国一のセレブなお姫様と言ったところでしょうか。

千姫が豊臣秀頼に嫁いだのは7歳の時：しかも秀頼の母・淀君は千姫の母・お江の実の姉であるため、二人は従兄妹同士でもあったのですが、政略結婚であると同時に豊臣方の人質としての意味合いが強かったようで、その前半生は幸薄いモノであったとのこと。そんな千姫に転機が訪れます。

1615年の大阪夏の陣で、実家である徳川家によって大阪城は焼け落ち、姑である淀君や夫・秀頼も自害して果て豊臣家は滅ぼされてしまいますが、落城寸前に当主の正室である千姫だけは救出されます。その時、まだ千姫は二十歳にもなっていないかったため、家康の側近・本多忠政の子・忠刻と再婚。（それまでに実は紆余曲折があったんですが、ここでは割愛ということので：）再婚した千姫は一男一女をもうけ、幸せ

な日々を送るかと思われた矢先、跡継ぎであった愛息・幸千代がわずか三歳で病死、後を追うように夫・忠刻も三十の若さで早逝：再び未亡人となってしまいます。

その後は、実家である徳川家に戻り剃髪して仏門に帰依すると、二人の夫の菩提を弔いながら静かに七十年の生涯を終えた：というのが一般的な歴史なのですが、真逆な「淫婦伝説」が残っていることでも有名です。

：というのも、三十路女盛りというところで夫に先立たれた千姫は、慣れ親しんだ姫路城を離れ、実弟である三代将軍・家光の待つ江戸城へと戻り、姉の不幸に深く同情した家光は、竹橋御門近くの五番町に下屋敷を建て、そこで静かに暮らせるようにと配慮します。

しかしこの『吉田屋敷』と呼ばれる邸から市中を見下ろす千姫が、イケメンを見つけると奥座敷へと誘い込み、夜な夜な淫奔の限りを尽くし、さらにコトが露見することとを恐れ用済みとなった男達を井戸に投げ捨てて殺してしまった：という逸話が「吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振り袖が」という歌とともに残っています。

いやはやネタは尽きないお姫様ではありますが、今宵はここまで。



細川ガラシャ

さてさて今回は、戦国時代末期：美貌と知性を兼ね備えながらも時代のうねりに翻弄された悲劇のヒロイン：「細川ガラシャ」にスポットを当ててみたいと思います。

ガラシャはかの明智光秀の娘で本名は玉子と言い、主君・織田信長の媒酌で戦国大名・細川幽斉の嫡男・忠興と結婚します。

細川忠興は、利休七哲人の一人で高名な茶人であると同時に、残虐で嫉妬深い武将でもあったそうで：愛妻の姿を見たというだけで屋根職人を手討ちにしたり、玉子を改宗させたと言われる侍女達の鼻や耳をそぎ落としたという記録すら残っています。

当初、夫婦仲は大変よく子宝にも恵まれて順風満帆だったのですが、実父・光秀による主君・信長への謀反、本能寺の変で光秀は羽柴秀吉によって討たれてしまいます。当然、主家殺しとして明智の一族郎党はことごとく死罪となったのですが、玉子の美貌と知性（そして実際には相当な床上手だったという文献が残っています）を惜しんだ夫・忠興が家臣の反対を押し切って、自分の領地に幽閉するという体で難を逃れます。

そして2年後に秀吉に赦され、大阪の細川家の屋敷に戻ると、数人の側室を侍らせて待つ夫の姿をみて大変幻滅した：と言われていますが、その後も玉子の躰にぞっこんだった忠興に抱かれては何人もの子を設

けてたりします（笑）。

その後玉子は、忠興の同僚・高山右近というキリシタン大名と親しくなることで、だんだんと異教に傾倒していき、天下人となった秀吉によるキリシタン弾圧のさなかに洗礼を受け、ガラシャと名乗ることになります。「ガラシャ」とはラテン語で「寵愛」を意味し、ハリウッド女優からモナコ公妃となったグレース・ケリーの「グレイス」は「ガラシャ」の英語読みだったりします。ちなみに玉子を描いたオペラの題名「グラシア」も同じ意味です。

結局この改宗をきっかけに二人の夫婦仲は決裂するのですが、関ヶ原の合戦に際して、夫・忠興が東軍に属したこと、西軍大将・石田三成に人質として大阪城に入るよう命令されますがガラシャは拒否し、家臣に胸を突かせ屋敷に火を放って果てる、という非業の死を迎えます。

そうそう：昭和56年に公開され話題を呼んだ『魔界転生』に、妖艶な淫婦として細川ガラシャが登場しますが、実は山田風太郎の原作には登場せず、深作欣二監督のアイディアで、戦国時代のエロ妖しいお姫様の代名詞的なイメージがあったのかもかもしれません。

いやはやネタは尽きないお姫様ではありますが、今宵はここまでというところで：



小少将

さて今回は傾国のロリータ若妻「小少将（こしょうしょう）」にスポットを当ててみたいと思います。

「小少将」は織田信長に滅ぼされた越前の朝倉義景の4人目の妻で、元は家臣の娘であり義景の母に仕えていましたが、15歳で彼に見初められて愛妾になった女性です。

朝倉家は、越前（いまの福井県北部）一乗谷城を拠点とする戦国大名で、開化天皇を祖として義景で十一代目という名門中の名門であり、父・孝景の代では越前のみならず隣国の若狭（いまの福井県南部）や近江（いまの滋賀県）にまで版図を広げる大名でもありました。

そして、子の義景も名門ゆえの学識の高さと優秀な家臣団に支えられ、戦国時代を順風に領国経営していたのですが、彼が寵愛する側室や跡継ぎの息子が相次いで亡くなってしまうという出来事が起き、意気消沈した義景は食事も満足に喉を通らず、とうとう病に伏せてしまう…という事態になってしまいます。引き籠もり状態になってしまった主君を見かねた家臣達が、立ち直ってもらい更に世継ぎも産んでもらおう…と白羽の矢を立てたのが、「小少将」でした。

「小少将」はその美貌だけでなく、若くして義景の実母に仕えるほどの学識を持ち、

さらに世継ぎを産む為に、あらゆる性技を会得して愛妾になったので、たちまち義景を虜にします。家臣達の思惑は成功したかに思えたのですが、すぐに男児・愛王丸が産まれると事態は一変します。

世継ぎの愛王丸は義景の実母に預けられ、「小少将」の為の新しい館を建て、美しい庭園を造り「小少将」からひとときも離れずに政務を疎かにするようになった義景から家臣達の心は離れていきます。

ついに一五七三年、義景は織田信長に攻められ一乗谷は落城、その敗走のさなかでも離ればなれになってしまった「小少将」を探し、見つけれぬまま自害して果て朝倉家は滅亡してしまいます。

その後、「小少将」がどうなったか…という記録が一切残っておりません。いやはやネタは尽きないお姫様ではありますが、今宵はここまで。



おつやの方

さて今回は、戦国時代には珍しい女城主として君臨した女性にスポットをあててみたいと思います。

女城主の名は「おつやの方」…。美濃（現在の岐阜県）岩村城主・遠山景任の妻であり、織田信長の叔母にあたる女性です。岩村城は、信濃や三河とも国境を接する重要な拠点でした。そのため、「おつやの方」と景任との間に子供が出来なかったので信長の五男「御坊丸」を養子に迎えるほど織田家にとっても大事な城だったと思われるのですが、その強固な絆が断ち切られてしまう出来事がおきます。

一五七二年：突如、甲斐の武田信玄が京に向けて進軍をはじめ、岩村城にも武田軍が侵攻してきます。防戦のさなかで景任が死去、家督は「御坊丸」に移りましたが幼いため、後見人として「おつやの方」が女城主として懸命に城を守ることになり、甥である信長に援軍要請の使者を出します。しかし、三河方面に侵攻してきた武田信玄の本隊との決戦を前に戦力を割くことができない織田家からは、援軍は来ませんでした。

「おつやの方」は知略を尽くして城兵たちとともに4ヶ月近くも籠城しますが、もはやこれまで…というところまで追い詰められてしまいます。ところが、武田方の大将

・秋山信友から意外な申し出があります。

曰く「我妻となれば城兵は全て助ける」。戦国の世とはいえ、開城の条件に城主である未亡人に結婚を迫った例など聞いたことがありませんが…察するに、信長の叔母ということとは戦国一の美女「お市の方」の叔母でもあり「おつやの方」もまた絶世の美熟女だったとのこと。

結局、「おつやの方」はその条件を呑み岩村城を新しく夫となった信友に明け渡します。それを聞いた信長は、実子を入質に取られ敵将の後妻になった叔母に対して激怒したとのこと。

それから3年後：長篠の戦いで武田方が大敗すると、岩村城奪還のために織田勢が押し寄せてきます。要衝である岩村城に武田方も援軍を送ろうとしますが、大雪に阻まれ到着することができず、城は織田の大軍によってあっけなく落城。「おつやの方」は信友とともに逆さ磔の刑に処せられ、波乱の生涯を終えます。

現在、恵那市にある岩村酒造に「女城主」という銘酒があり「おつやの方」の悲劇がいまも町で語り継がれているそうです。

いやはやネタは尽きない女城主ではありますが今宵はここまで…。



立花間千代

戦国時代には、世継ぎに男児が居なかったり、いても幼少だった場合に実母が代理で女城主になるということは、さほど珍しくはなかったそうですが、その中でも、わずか7歳で女城主となった姫がおります。

その名を「立花間千代（ぎんちよ）」：キリシタン大名として有名な大友宗麟の家臣で、生涯37回の戦で一度も負けたことが無いという猛将としても知られる立花道雪の娘で、生まれは筑前國（現在の福岡県）赤司城です。

「間千代」は、道雪が56歳の時に産まれた一粒種で、道雪に可愛がれて育てられたのは勿論ですが、それだけでなく幼い頃から文字を習い、剣を振るわされていたそうで、最初から後継者としても育てられました。

道雪が63歳になったのを機会に立花山城主を「間千代」に譲ります：その時「間千代」はわずか7歳でした。

そして6年後、道雪は大友氏の一族である高橋紹運の息子・宗茂を婿に選び、宗茂が立花姓を名乗ることで、「間千代」は女城主から北の方（奥方）へと役目が変わりますが、才色兼備で父親譲りの勝ち気な性格から、夫婦は衝突するようになります。

宗茂自身は、義父・道雪の期待以上の武将として活躍し、大友氏の領地へ進行してきた島津氏を撃退するばかりでなく、逆に

島津氏の軍勢を追いかけて勝利するなどの活躍をみせ、太閤・秀吉の覚えもめでたく、柳川城主・十三万二千石の栄転が決まります。しかし、父・道雪が眠る地から離れるのを拒む「間千代」との間で亀裂が生じ、宗茂が「間千代」と性格が正反対のはんなり京美人を側室に迎えると「間千代」は城の郊外に別邸を建て、今で言う「別居婚」となってしまう。

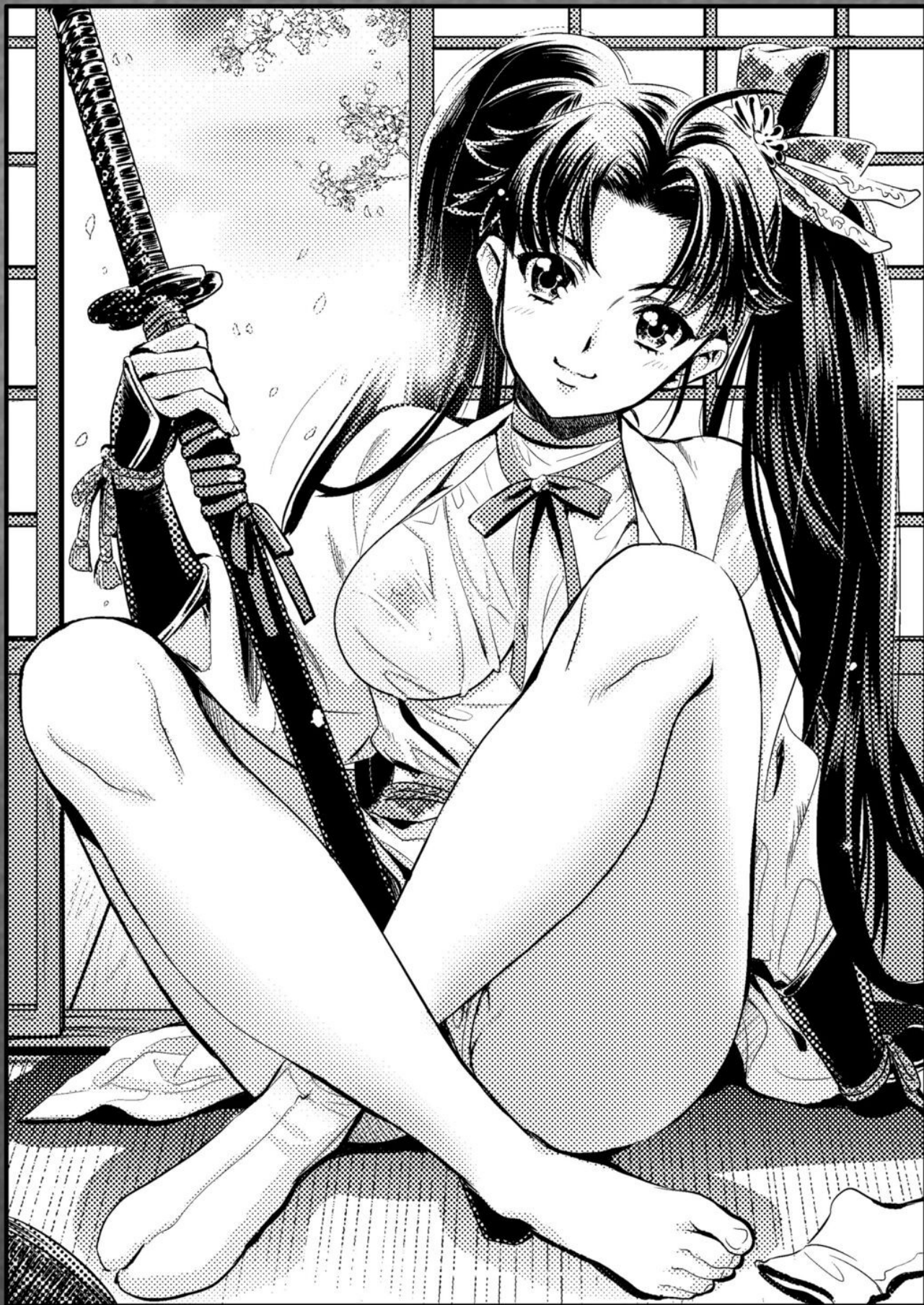
慶長5年（1600年）の関ヶ原の合戦で、夫・宗茂が西軍に属することを決めた時も「間千代」は猛反対をしますが、結果は歴史の教科書の通りで：敗北した西軍側の柳川城には加藤清正が攻め入ります。

しかし、城の明け渡しを迫る清正に対し「間千代」は紫脅しの鎧に身を固め、翠の黒髪に白鉢巻を締め、同じ装束の侍女200名と薙刀片手に応戦します。

それを見た清正は「流石は道雪殿の血を引く姫君なり」と戦わずに兵を引き上げたといいます。

その後、夫の柳川城主復帰を願って寺社巡りをするなど健気な面を見せる「間千代」でしたが、立花家再興を見ることがなく関ヶ原の2年後に早逝してしまいます。

いやはやネタは尽きない姫様ではありますが、今宵はここまで。



里見種姫

江戸時代に滝沢馬琴が記した『南総里見八犬伝』と言えば、教科書にも出てくるくらいに有名な物語ですが：そのヒロインである「伏姫（ふせひめ）」には実在するお姫さまがモデルとなっていることをご存じでしょうか？

その名は「里見種姫（さとみ・ふさひめ）」：安房國（現在の千葉県南端部）の戦国大名・里見家の六代目：義堯（よしたか）の娘として生をうけます。

ちなみに『南総里見八犬伝』の物語をかいつまんでいきますと：安房の大名・里見義実が娘が産まれますが、三伏（夏の盛りの頃を昔はこう呼んでました）だったので「伏姫」と名付けられます。幼少の頃より「かぐや姫」になぞらえられる美しさを持ち、年頃になると中国の書物にも精通する才媛に育ちます。ちょうどその頃、安房の國に安西景連という敵が攻めて来たのですが、里見軍は連戦連敗で追い詰められていきます。義実が飼った犬の「八房」に戯れで、「安西の首を噛み殺してきてくれれば、姫をやるう」と言ったところ、見事に景連を殺し首を持って帰ってきます。義実は困惑しますが、「伏姫」は「約束は約束」と城を出て、山奥の洞窟に「八房」と籠もり読経生活を送りますがまもなく懐妊します。「伏姫」は獣の子を宿していないことを証

明するため、自ら腹を斬るとそこから白い霧とともに数珠が飛び散り、その数珠には「仁義礼智忠信孝悌」の文字が刻まれて：とここからはよく知られている展開へとなっていくのですが、そのモデルとなったのが、さきほどの「種姫」です。

実際の「種姫」は正木信茂という武将の正室で、信茂は若いながらも上総・下総における里見軍の指揮を主君・里見義堯から委任されるほどの有力武将だったのですが、関東の有力大名・北条氏康が1562年に下総の国府台（現在の千葉県松戸市）に侵攻してきたことにおきた第二次国府台合戦で奮戦するものの1歳で討ち死にしています。

夫の死後、出家して尼となった「種姫」は山奥の寺へ隠棲して夫の菩提を弔う余生を送ったそうですが、北条家の滅亡を見ることが無く、1589年に没したそうです。

馬琴が南総で活躍する若武者たちをモデルに、八犬士を活躍させた物語のヒロインに「種姫（ふさひめ）」を選び、その音でつながる「伏姫（ふせひめ）」としたのは、「伏」の文字が「人」と「犬」を合わせたモノだったからだそうです……。

いやはやネタは尽きない姫様ではありますが、今宵はここまで……。



養徳院

今回は、お姫さまというよりも「乳母」として有名だった「養徳院（ようとくいん）」という女性にスポットをあててみたいと思います。

「養徳院」は美濃國（現在の岐阜県）の池田という土地の一介の武将・池田政秀の娘として1515年に生まれた事以外は、本名はもとより、配偶者である滝川恒利という武将が養子扱いとなっているなど、謎の多い姫です。その姫が一躍、歴史の表舞台に出ることになった切っ掛けが、「乳母（めのと）」になったことでした。

長男の恒興が生まれてしばらく後、池田家は尾張（現在の愛知県）に移り住みますが、そこで織田家の知遇を得ます。当時、織田家の当主・信秀に嫡男の吉法師（後の信長）が産まれますが、その赤ん坊は生まれた時から痲癩がきつく、何人もの乳母の乳首を噛み切ってしまうほど手に負えないものだったそうです。

そこで、ちょうど長男の恒興が生まれたばかりで、織田家に出仕したばかりの恒利の妻だった、豊満で乳の出が良くと評判の姫が「乳母」として召され、何故か吉法師はその乳母にだけは懐いたと言われています。

す。

また、乳母になると同時に夫・恒利と離縁（恒利はその後すぐに謎の死を遂げています）して主君である信秀の側室に迎えられることから、なかなかの美貌と肉体だったらしく、落飾して「養徳院」と名乗りますが、織田家中では「大乳母様」と呼ばれ特別な存在となり、息子の恒興も信長の小姓頭として取り立てられています。

恒興が桶狭間、美濃攻略戦、姉川の戦い、と織田家の重要な戦で、数々の武功を立て、犬山城（国宝）の城主に任ぜられると、母である「養徳院」にまで知行・千五百貫が与えられるなど厚遇され、本能寺の変後は秀吉側について重きをなし、恒興の息子で「養徳院」の孫である輝政は姫路藩主にまで出世します。

その後、秀吉の時代になっても「養徳院」は厚遇され続け94歳という長寿での大往生だったそうですが、それにしても「乳」でここまで成り上がった女性も珍しいかもしれませんね…。

いやはやネタは尽きない姫様ではありますが、今宵はここまで…。



寿桂尼

いままでに「女城主」と擲擧された勇ましいお姫さまを何人か紹介したことがありますが、その上をいく「女戦国大名」と称された女性に今回はスポットをあててみたいと思います。

その女性の名は「寿桂尼（じゅけいに）」：公家の権大納言・中御門宣胤の娘として生まれ、駿河の守護大名・今川氏親に嫁ぎましたが、『海道一の弓取り』と称された今川義元の実母と言った方が判り易いかもしれませんね。公家のお姫さまが駿府・駿河（現在の静岡県）の武家に嫁ぐのは大変だったと思われますが、夫の氏親は有能な武将であり、3男3女をもうけるなど夫婦仲も良かったようです。

ただ、氏親は中風を患い亡くなるまでの10年近くを病床に伏したままだった為、有名な家法である『今川仮名目録』はその殆どを妻である「寿桂尼（姫時代の名前が史書に残っていないので剃髪後の名前です）」が制定したとも言われています。

1526年に氏親が亡くなると、その長子・氏輝が跡を継ぎますが、まだ14歳という若年だった為、生母の「寿桂尼」自身の印判で公的文書を発給していた資料が数多く見つかっており、実質的に今川家の政務を取り仕切っていたことから「女戦国大名」

と呼ばれています。やがて氏輝は成長し、名実ともに戦国大名としての手腕を発揮し始めた1536年、若くして急逝、次男・彦五郎も同じ日に何故か死去するという出来事がおきます。すると氏親の側室の子・玄広恵深が、今川家の重臣・福島上総介の後ろ盾を得て家督を継ごうとします。そこで「寿桂尼」も実子である三男・承芳（後の義元）をたて、反対勢力である太原崇孚（雪斎）や親族武将・瀬名氏貞を取り込むことに成功し、恵深に対抗します。世に言う『花倉の乱』と呼ばれるモノで、「寿桂尼」自身も敵地に乗り込み直談判するなどの剛胆な行動が功を奏し、承芳側の勝利で乱を制します。

その後、国主となった義元を補弼する「寿桂尼」や、乱で加勢した太原雪斎などの優秀な家臣団に支えられ、今川家は三河の國をも手中にして最大版図にまで広がり、戦国時代を代表する大大名にまで成長します。しかし、その後の今川家は織田信長に敗れ、義元が討たれると「寿桂尼」が亡くなった半年後には武田信玄によつて滅ぼされてしまします。彼女は最後まで今川家の行く末を想っていたようですが、今宵はここまで。



出雲阿国

このコラムも今回で3年目に突入です。戦国時代のお姫さまを題材にして、連載が続くのか?…と言われつつ、結構、有名・無名を問わずに取り上げるお姫さまは後から後から出てくるので、まだまだ暫しお付き合い下さいませ。

…と言うわけで今回は3年目突入記念として、番外編というか、お姫さまでは無いのですが、戦国時代の女性としても有名な「出雲阿国（いずものおくに）」にスポットをあててみたいと思います。

歌舞伎の原点となった興業を創始したのが「出雲阿国」と言われて、1603年（関ヶ原の3年後ですね）に京の都で「かぶき踊り」で鮮烈なデビューを飾ります。

「阿国」は出雲國（現在の島根県）の鍛冶職人・中村三右衛門の娘で出雲大社の巫女であった…と言われていますが、確たる証拠は残っていない上、歴史に登場する際には「於国」「国子」「おくに」などのように表記されています。「阿国」とするのは後世の『出雲阿国伝』に起因しているのですが、この書物自体が、織田信長に召し抱えられたとする内容で、まったく年代が合っていない可能性があります。

歴史に初めて「阿国」が登場するのは、1582年に春日大社で「国」という娘が、

「ややこ踊り」を踊ったという記録なのですが、この「ややこ踊り」は地味な奉納舞だったためか、特に人々の記憶に残った訳ではなかったようです。

そして先ほどの「かぶき踊り」で大ブレイクする訳なのですが、この「かぶき踊り」というのは、「阿国」が脇差しを帯び華麗に男装して、女装した座員を相手に「茶屋遊びの踊り」を披露するというモノで、一説には夫である狂言師の名古屋山三郎が指導したと言われていましたが、現在ではこの説も否定されています。

一躍、戦国時代のアイドル?となった「阿国」は、北野天満宮で披露したり、禁裏や公家屋敷に招かれたりしたあと、江戸城でも興業を行い大成功を収めたと記録されています。

しかしその後、「阿国」を真似た亜流芝居が盛んになり始めると同時に、遊女が「かぶき踊り」を舞うエロティックなものも出てはやされるようになります。時の権力者である徳川幕府によって女性の歌舞伎は禁止され、それと前後して「阿国」自身の記録も途絶えていることから、この頃に亡くなった…と言われています。

いやはや謎だらけの女性ではありますが、今宵はここまで…。



春日局

戦国末期を描いた大河やドラマに欠かせぬ存在として、近年、定番?となっている女性と言えば、「春日局(かすがのつぼね)」ではないでしょうか?

いまでは『大奥』を創始した女性として歴史に興味の無い人でもその名を知らない人はいないほどの女性ですが、今回はその「春日局」を取り上げてみたいと思います。「春日局」は、本名を「福」と言い、明智光秀の家老・斉藤利三の娘で、『頑固一徹』の逸話で有名な稲葉一鉄の孫にあたり、丹波國(現在の兵庫県)の黒井城に生まれます。幼少期を城主の姫として過ごしますが幸せな時間は短く、父・利三は明智光秀とともに本能寺の変で織田信長を討ちますが、その後すぐに羽柴秀吉に捕らえられ刑死します。女性であった福は辛うじて難を逃れ、その後、縁あって小早川秀秋という大名の家老であった稲葉正成の後妻になります。関ヶ原の合戦の後に主君・秀秋と意見が対立して出奔。夫は浪人の身となっています。

そんな「福」に人生の転機が訪れます。言わずと知れた、將軍・徳川秀忠の嫡男・竹千代の「乳母」となったことで、ドラマなどでは乳母募集の高札を見て応募したように描かれています。天下の大將軍の嫡

男の乳母を一般公募するハズは無く(笑)。 「福」がコネと巧みな交渉術でその座を射止めたというのが史実のようです。同様に、酒色に溺れた夫・正成に失望した「福」が、愛妾を刺し殺し離縁して乳母になったという逸話も必ず描かれますが、やはりこれも脚色らしく、「春日局」となった後の「福」の前夫や稲葉家への対応もあり、如何に『大奥』が江戸庶民に疎まれていたか、ともとれる話です。

乳母となった「福」がその後、三代將軍となる家光を立派に育てあげたことで、絶大な権力を得たことは細かく説明するまでもないでしょう。その象徴たる『大奥』では、「春日局」以降の乳母は、黒子の様な頭巾を被って授乳させるという奇習ができますが、これは乳母が政治に口を挟まない様にと考案された風習だそうです。

そもそも乳母就任についても、「福」の家柄や夫・正成の関ヶ原の合戦における功績が考慮されたというのが一般的な見方ですが、お世継ぎ問題にまで口を挟めた史実から徳川家康の愛妾の一人だったのでは、家光自身が「福」の実子だったのではないかという説まであったりして...

創作意欲をかき立てる女性ではありませんが、今宵はここまで...



如春尼

今回は一向門徒の総本山である石山本願寺が「東本願寺」と「西本願寺」へと分裂してしまった原因と言われる「如春尼（にしゅんに）」を取り上げてみようと思います。

「如春尼」は時の太政大臣・三条公頼の三女として1544年に生まれますが、当時父・公頼は周防國大内氏を頼って下向しており、一番上の姉が嫁いでいた戦国大名・細川晴元の庇護を受けていました。そして「如春尼」が14歳の時、晴元の養女となり、大坂の石山本願寺の法主であった証如上人の子・顕如に輿入れすることになります。

当時、本願寺は明（現在の中国）貿易で莫大な利益をあげており、一向宗を排除しようとしていた戦国大名達が借金を申し出るまでになっていたと言われ、畿内の有力大名であった晴元もまた金銭援助を目当てとしていたのは歴然だったようです。そして夫である顕如が没すると、天下人となった豊臣秀吉は嫡男の教如を後継者に定めますが「如春尼」は次男の准如を後継者にして欲しいと「顕如の遺言状」（現在の学説では偽物とされています）をもって訴え、それが認められてしまいます。その際には、

有馬温泉に湯治に来ていた秀吉が妖艶な未亡人だった「如春尼」の色事に惑わされて：という噂がまことしやかにでるほどでした。しかし当然のように一度嫡男に決まった後継者が時の天下人の鶴の一声で変更されてしまったことは、後に大きな禍根を残してしまいます。関ヶ原の合戦で、後継者の地位を追われた教如は「東軍」に、そして准如は「西軍」に付きますが：結果はご承知の様に「東軍」の圧勝となり、徳川家康は論功行賞で教如の本願寺教団での地位を認めたため、教如の「東本願寺」と准如の「西本願寺」に分裂してしまいます。その為、原因の一端となった二人の兄弟の母である「如春尼」に非難の目が向けられる事が多いのですが：実際には一向門徒の勢力を削ぎたい家康がわざと東西に分裂するように仕向けた：というのが正解のようです。ちなみに「如春尼」は最愛の息子である准如が「西本願寺」を建立する2年前に亡くなっていますが、今春の高校野球で優勝した『龍谷大平安』はこの「西本願寺」の学寮として成立したモノだとは、お墓の中の「如春尼」もびっくりでしょう。

今宵はここまでということでは…。



小野於通

今回は戦国時代の文学少女とでも言いま
すか：浄瑠璃『十二段草子』の作者と誤伝
された謎だらけの才媛「小野於通」につい
て取り上げてみようと思います。

「小野於通（おつう、または、おづと
も）」は戦国時代末期に、当時の女性とし
ては極めて珍しく、詩歌や琴、絵画などに
秀でた才媛として実在した女性で、歴史的
な史料にも数多く登場するにも関わらず：
生没年も出身地も実の親も諸説あつて確定
情報がありません。

有力な説としては、美濃國（現在の岐阜
県）の戦国大名・斎藤道三の家臣・小野政
秀の娘であるらしい、ということや、豊臣
政権時代に淀君こと浅井茶々の侍女として
仕えていた（これも「於通」の評判を聞い
た徳川家康が、孫娘の千姫が秀吉の息子・
秀頼に嫁ぐ際に付き添わせたという説もあ
ります）ということと：その際に先出の浄
瑠璃『十二段草子』（15世紀後半には成立し
ていたモノなので「於通」の創作というの

は江戸時代の誤伝）』に曲節をつけて改作
し、大阪城で披露したと言われています。

また慶長3年の、豊臣秀吉が自身の権勢を
世に知らしめる為に催した『醍醐の花見』
で、「於通」の実筆による短冊が残されて
いるほか、『柿本人麻呂図』や『達磨図』
といった「於通」が描いたとされる貴重な
作品が現存しているのですが：これすらも
「於通」の娘が同名（おつう、もしくは阿
通とも呼ばれており、逆に同一人物説まで
あり：とてもややこしい）だったため、娘
の作品だったという説もあつたりします
（苦笑）。因みに、あの真田幸村の実兄で初
代信濃上田藩主であつた真田信之は「於通」
の生涯の友人として多くの手紙（文通相
手？）を残しています。父や弟を大阪の陣
で亡くしたことや、妻に先立たれた悲しみ
を慰められたり、彼の遺書も「於通」が受
け取ったほどだったそうで…。

まさに謎に満ちたお姫様だったようです
が、今宵はここまでということと…。



お禰

戦国時代の女性で知らない人は殆ど居ないのに、連載40回を超えてまだ取り上げていないお姫様がいました(苦笑)。それは戦国時代三英傑と呼ばれる木下藤吉郎秀吉と、豊臣秀吉の正室「お禰(おね)」です。ドラマや映画、小説や漫画にゲームと：様々なモノに登場するお姫様の筆頭と言っても過言では無いこの女性、通称「北の政所(きたのまんどころ)」について取り上げてみようと思います。

「お禰」は尾張國(現在の愛知県)の織田家の家臣・杉原定利の次女として天文18年に生まれます。よくフィクションの世界では「ねね」と呼ばれることが多いのですがこれは江戸時代の『絵本太閤記』で広まった誤解と言われています。

さて、この「お禰」ですが戦国時代としては珍しく自由恋愛(というか藤吉郎の一方的な一目惚れ)で結婚したのですが、当時の藤吉郎は身分が低く「お禰」の実母が反対した為、織田家の足輕組頭・浅野長勝の養女に一端なつてから祝言をあげています。

さて周囲の反対を押し切つての結婚ではありましたが、その後の秀吉の活躍は万人が知るところで、あれよあれよと織田家の

重臣にまで出世します。二人の仲は順調ではあったのですが、子に恵まれないことで秀吉が側室も持つようになると「お禰」は正室として悩むことが多くなっていました。ある時、夫の代わりに主君・織田信長に安土城へ挨拶に赴く用事が出来た際、ふと秀吉の女性関係のことで愚痴をこぼしたところ、信長は秀吉とその側室に「お禰ほどの立派な女性はいないので大切にするように」と、異例の手紙をしたためたという記録が残っており：同時に「お禰」には、もう足輕の妻ではなく大名の正室なのだから堂々と振る舞うように、と諫めたという逸話も残っています。

二人の夫婦愛は、秀吉が死ぬまで変わらないモノではありましたが、その死後は落飾出家して「高台院」と名乗り、秀吉の側室で子を宿した「淀殿」によつて表舞台から遠ざかることになります。そして晩年は『大阪の陣』で豊臣家が滅亡するのを見つめながら秀吉の菩提を弔い、静かな余生を過ごしたそうですが：その際に、徳川家康から化粧料と称して一万六千石も与えられていたそうで：この莫大な寡婦年金？はどういう意味なのか：気になります。今宵はここまでということでは。



井伊直虎

いままでにも女武者や女城主といったお姫様を取り上げたことはありませんが：『女地頭』の異名を持ち「直虎（なおとら）」と男性の名前で領国を治めた「井伊次郎法師」という女性を取り上げてみようと思います。

「直虎」は遠江國（現在の静岡県）の井伊谷（現在の浜松市）を治める国人・井伊家の当主・直盛の長女として生まれましたが男児が居なかった為、女性の名前ではなく井伊家の代々の当主の幼名である「次郎」と「法師」を繋げ「次郎法師」として育てられました。そして幼い頃から、許嫁として従姉弟の直親を婿養子に迎えることが決まっていました。

ところが、井伊家の家老・小野道高が今川氏に直親の謀反を讒言：父と弟は自害させられますが、直親は命からがら信濃國に落ちのびます。そして二度と遠江には戻れないと考え、婚約者がいるにも関わらずその土地の有力者の娘を正室に迎えてしまい、許嫁であった直虎は失意のまま出家してしまいます。その後、時は流れ：『桶狭間の戦い』がおき、次郎法師の父・直盛が戦死してしまい、信濃から戻った直親が跡を継いだのですが、またしても小野氏の讒言に

よって今川氏真の命で殺害され、井伊家は滅亡の危機にたちます。そこで次郎法師は還俗（「尼」は基本的に還俗できないのですが、男として「僧侶」になつていたので還俗が許された経緯があります）し、名を「直虎」と改め井伊家の当主になりました。

「直虎」の政治手腕はとても優れており、風前の灯だった井伊家を再興し『女地頭』と渾名されるまでになったのですが：それを快く思わない小野氏がとうとう今川家の力を借りて井伊谷城を乗っ取ってしまったのです。しかし、小野氏の専横に叛旗を翻した井伊谷三人衆と隣国・三河で勢力を拡大していた松平家康の力を借りて、井伊谷城を奪還することに成功し、直親を事実無根の罪で讒言したことを咎められた小野道高は斬首されます。

その後、直虎は許嫁であった直親の遺児・虎松を養子に迎え、名を「直政」と改めさせると徳川氏に出仕させます。

ちなみに、ゆるキャラブームの火付け役となった「ひこにゃん」のモデルは、この「井伊直政」なのですが、大きな意味では「次郎法師」のお陰かも知れませんね（笑）。
今宵はここまでということでは。



今参局

今回は、ちよつと趣向を変え番外篇として室町幕府が戦国時代になつてしまつた切掛の女性とも言われる『三魔』の一人「今参局（いままいるのつぼね）」について取り上げてみようと思います。

まずこの『三魔』についてですが：足利8代将軍・義政の側近で烏丸（からすま）資任、有馬（ありま）持家、そして今参局（通称お今）の名前に「ま」が付いていたコトに由来しています。

さてこの「今参局」ですが：将軍側近・大館満冬の娘に生まれ、18歳の時に足利義政の乳母となりましたが、義政は10歳で、いわゆる授乳の為の乳母ではなく、家庭教師としての職務でした。これは3代将軍・義満を頂点にして衰退が始まつた足利幕府の暗雲とも関係し、特に先代の7代将軍・義勝が早逝してしまつたことで、わずか8歳だつた義政が後継者になり、立派な為政者にするべく教養と美貌を兼ね備えた「今参局」が養育係となつたのですが：学問だけでなく「将軍としてお世継ぎを設ける事（Ⅱ性技）」に没頭してしまうことになります（笑）。そして義政が14歳で征夷大將軍になると、正室より先に「今参局」を側室として迎えてしまいます。童貞の筆おろし

からずつと相手になつたもらつた女性なので氣心が知れていたのかもしれませんが、問題はこの「今参局」が高い教養もあつたことで：側室になつた途端に政治に口を挟むようになったしまったのです。

ある時、尾張（現在の愛知県）の守護であつた斯波氏に対して、守護代の織田敏広を更迭し織田郷広にする人事を将軍・義政が発し、これを幕府の中核である管領の細川勝元と畠山持国が反対し、義政の実母である日野重子が出奔するという事件が起きるのですが、この裏に「今参局」が暗躍していたと言われ、この事件が後々の戦国時代の幕開けと言われる「応仁の乱」の原因と言われています。

その後、何と「今参局」は義政の子を産み、幕府で彼女に逆らえる者はいないほどの権力を持ちましたが：ほどなく、正室として同じく悪名高い「日野富子」が迎えられると二人はすぐに対立していきます。そして、富子の長男が夭

折したのは「今参局」の呪詛の所為という言葉葉を信じた義政自身によつて流罪を言い渡され、失意のうちに自害して果てたそうで「毒を以て毒を制された」オチですが：今宵はここまでということでは：



阿波の小少将

今回は「戦国一の妖女」と呼ばれる「阿波の小少将（あわのこしょうしょう）」を取りあげてみたいと思います。

以前のコラムでも、越前朝倉氏を亡国に導いた「小少将」という女性について書きましたが、実はこの頃の側室には小少将という名前を持つ女性が、様々な大名家の公式文書に出てくるメジャーな名前だったりします。しかし、そんな「小少将」達の中でも「阿波の小少将」の性と権力欲での遍歴は群を抜いています。

「阿波の小少将（以下、小少将）」は阿波國（現在の徳島県北部）の西条東城主・岡本清宗の娘として生まれ、四国一の美少女と呼ばれて十代前半の若さで阿波守護・細川持隆の側室に迎えられ、嫡男・真之を出産します。

ところが、四国を実質支配していた三好長慶の弟・義賢と肉体関係を持つようになり、義賢は「小少将」欲しさについては主君である筈の持隆を誅殺して、彼女を正室に迎えてしまいます。そして、二人の間には三好長治、十河存保という息子が生まれ、夫である義賢は久米田合戦の折に戦死してしまいます。義賢の後を嫡男でもある長治が継ぐことになったのですが、元服前であ

ったため、三好家の重鎮・篠原長房が後見人となります。あろうことか未亡人となった「小少将」は長房の弟・自通と肉体関係を持つてしまいます（笑）。

そのことを強く諫めた長房に対し、ことの露見を恐れた自通は主君である長治に讒言し、忠臣である長房を攻め滅ぼしてしまいます。有能な家臣を失った長治は長宗我部家の支援を受けた異父兄細川真之と戦い敗死してしまい：さらにその真之も織田信長を味方に付けた異父弟・十河存保によって殺されてしまいます（苦笑）。

まるでジェットコースターの様に「小少将」と肉体関係を持つ戦国武将やその息子達が血で血を洗う抗争を繰り返しているうちに、四国の覇権は長宗我部元親のモノとなり、「小少将」の居た勝瑞城も陥落しますが：なんと、四十後半になってもなお美貌の衰えない「小少将」を元親は側室に迎えるのです！

しかし彼女と肉の交わりを持った、阿波細川家、三好家、篠原家、長宗我部家、全て滅ぼしてしまうほどの「妖しい魅力」はなんだったのか？

：今宵はここまでということでは…。



山之手殿

来年の大河ドラマは真田幸村を題材にしたモノ：と言うことで、今までにも幸村ゆかりのお姫様達（竹林院、阿梅、小松姫など）を紹介してきましたが、今回は幸村の生みの親である実母「山之手殿（やまのてどの）」を取りあげてみたいと思います。

さて、この「山之手殿」というお姫様：幸村のみならず、江戸幕府に於いて初代信州松代藩主となる真田信之の母でもあるのですが、その割に出自に関する資料が殆どありません。まず生年が全く判っておらず長女・松姫の生年から逆算して天文18年頃とされています。そして出身地ですが、こちらも京都らしいということになっていますが、これも後年の真田家の文書で『京の御前様』と表現されていたことから京都で産まれたのではという推測です。

さらに、家系に関してですが：公家の菊亭晴季の娘となっているのですが、現実問題として甲斐の大名である武田信玄の重臣のそのまた下の侍大将であった武将（真田昌幸）が正室として娶るには家格が違いすぎる上に、そもそも主君である信玄の正室である三条方の三条家と菊亭家が公家として同格なので、後世の「盛り」な気がします（笑）。

さて、「山之手殿」ですが：甲斐武田氏の武将・武藤喜兵衛（後の真田昌幸）に嫁ぎます。夫婦仲はよく一男二女に恵まれ、喜兵衛は「信玄の眼」と称される有望な若武者でしたが、信玄の死後、状況は一変します。天下布武を唱える織田信長と「長篠の戦い」で対峙した主君・武田勝頼は完敗し、喜兵衛の二人の兄も合戦で討ち死にしました。急遽、真田家を継ぐことになりましたが、さらに「天目山の戦い」で武田家は滅亡してしまいます。

主家滅亡後も昌幸と名を改めた喜兵衛と「山之手殿」と有能な二人の息子（信之、信繁）とともに、真田家を守り通し、「関ヶ原の戦い」では西軍に属し徳川秀忠の大軍を居城・上田城で食い止める活躍をしますが：戦いは東軍の勝利に終わり、夫である昌幸と息子の信繁（幸村）は高野山に幽閉され、「山之手殿」は東軍に属した嫡男・信之に引き取られて生涯を終えました。彼女の死後、息子の幸村は豊臣家に請われ大阪城に入り「真田丸」を築いて徳川家を苦しめ、大河ドラマの主人公になるとは夢にも思わなかったでしょうが：今宵はここまでということでは：



三条の方

戦国時代：特に後世の書物やそれを元にした映画やドラマは「女」は「男」を支える陰の存在としてよく描かれますが、それは史料が極端に乏しいからとも言えます。その為、実像よりもメディアが作り上げた虚像が浸透してしまった不運なお姫様も少なくありません。今回はそんなお姫様の人：武田信玄の正室「三条の方」（さんじょうのかた）を取りあげてみたいと思います。

「三条の方」は一五二一年に京都の左大臣・三条公頼の次女として生まれます。姉は管領家の細川晴元夫人に、妹は本願寺顕如の裏方（正室）とこれ以上無い家格のお姫様であったにも関わらず、甲斐國（現在の山梨県）の守護職・武田家の跡取り息子である晴信（後の信玄）に15歳で嫁いだのでかなり都落ちなイメージがあります。特に武田家が滅ぼした諏訪家の娘・湖衣姫を晴信が側室に迎えてからの「三条の方」の描かれ方は公家の名門を鼻に掛ける高慢ちきで嫉妬深く、湖衣姫に辛くあたる悪妻のイメージで定着しています。

さて、実際の「三条の方」ですが：嫁いだ翌年には嫡男・義信を出産、その後も仲睦まじく3男2女に恵まれます。さらに名

僧・快川和尚は「大変に美しく、御仏への信仰も篤く、周りの人々を包み込む様な慈愛を持ち、春の陽光のように穏やかで温かい人柄でした」と「三条の方」を絶賛する記録が残されています。

しかし、順風で平穏な甲斐での新生活の様に思えますが、子供達に関しては悲劇が次々と襲います。次男の信親は先天的に盲目であつたため竜芳と名を改め僧籍に入り、三男の信之も生まれつき身体が弱く早逝してしまいます。残った嫡男の義信に「三条の方」は愛情を注ぎ込みますが、義信は父・晴信への謀反を疑われ、幽閉されたのちに自刃させられてしまいます。また、長女の黄梅院は政略結婚で今川家に嫁いでいましたが、晴信の駿河侵攻で今川家から離縁されて甲斐に戻った翌年に病死してしまい末娘の見性院は武田家の親族衆筆頭の穴山梅雪の正室となりますが：梅雪は武田家を裏切つて滅亡に追い込んでしまいます。

次々と不運に見舞われ齢五十で失意のまま亡くなった「三条の方」ですが：その数年後、晴信は臨終の間際に「自分の死を三年隠し、三条の方が眠る円光院に密葬にするように」と遺言したそうです。

今宵はここまでということでは…。



立原なみ

今では戦国武将で一番人気と言えば真田幸村なのですが：戦前ですと「願わくば我に七難八苦を与え給え」と言う名台詞でお馴染み、山中鹿之助がかなりの人気を博していました。今回はその鹿之助を女手一つで育て上げ、賢母の鑑とされた「なみ」を取りあげてみたいと思います。

「なみ」こと立原なみは山陰一帯を支配する大大名・尼子氏の家臣・立原綱重の娘として生まれ、尼子の庶流・山中満幸に嫁ぎますが、夫は27歳という若さで早世してしまい、鹿之助を含めた幼子3人を「なみ」が一人で育てることになります。特に嫡男でもある鹿之助には、主の居ない武家ということでけつして暮らしは楽では無かったのですが、並々ならぬ愛情と期待を寄せ、厳しく躾けたようです。鹿之助が幼少の頃仲間の子供達と戦ごっこをしていたのですが、鹿之助が尼子側と敵側に分け自分が尼子側の大将として遊ぶことを激しく咎めました。曰く「お前は主君の代わりとなつていい気持ちで戦つていただろうが、敵役にされた友達はそのことをどう思うかを考えなさい！」と同時に「なみ」は木綿の綿入れを作つては貧しい鹿之助の仲間達に分け与え、食事をふるまったりもしていました。

た。

それから暫くすると、主家であった尼子氏は毛利元就によつて滅ぼされ、家臣は散り散りとなつてしまつたのですが：鹿之助は「尼子家再興」の旗印を起て立ち上がります。すると、様々なところから鹿之助を慕つて若武者が集まりそれらは後に「尼子十勇士」となるのですが：彼らは皆幼い時に「なみ」に面倒をみてもらつた子達だったので。鹿之助は母の教えである「決して部下を見殺しにしない」「勝ち戦では必ず同じ席で祝杯をあげる」等を忠実に守り彼らとともに勇敢に戦いました。当初は破竹の勢いだった鹿之助でしたが、頼みの羽柴秀吉の援軍は全く現れず、ついに毛利の大軍勢の前に最後の砦・月山城で徹底抗戦をすることになり、母の「なみ」や妻子も一緒に籠城することになります。しかし、長い籠城生活の果てに心身が激しく衰弱した「なみ」は、尼子氏が毛利家に降伏するわずか一週間前にこの世を去つてしまいました。

その後、鹿之助は仲間達の助命嘆願と引き替えに捕虜となり、鹿之助の才覚を恐れた毛利の家臣達によつて謀殺されてしまいました：今宵はここまでということでは……。



早川殿

戦国時代のお姫様の逸話として残るのは時代の所為か転落人生の方が多いのですがそんな人生を送ったお姫様の中でも、頂点から一気に転げ落ちてしまったお姫様「早川殿（はやかわどの）」を取りあげてみたいと思います。

「早川殿」は、相模（現在の神奈川県と静岡県の一部）の大大名・北条氏康の長女として生まれ、同時期には甲斐の武田信玄や駿河の今川義元といった有力大名達と関東の覇権を争っていたのですが、武田は上杉謙信と戦う為、今川は京都に上洛する為、北条は関東統一という目的の為に「三国同盟」を結ぶことになり「早川殿」は今川氏の嫡男氏真に嫁ぎました。しかしこれだけの有名な武将達の架け橋となったお姫様だったのですが、実は正確な生年や本名も全く判っておらず、自分の生家である北条家の嫡男・氏政の姉なのか妹だったのかですら諸説あったりします。

「早川殿」の輿入れは政略結婚ではありませんが、氏康は彼女を溺愛していたという史料があるくらいその輿入れは壮大で従者は綺羅を飾り色とりどりの嫁入り道具が披露され見物人で溢れ返ったと『妙法寺伝』には記されています。

そんな幸せの絶頂だった「早川殿」ですが「桶狭間の戦い」で義父・義元が織田信長に討たれ、人生が一変してしまいます。夫でもある氏真は暗愚なイメージで語られることが多いものの実際には温和で兵法にも通じた教養人だったそうですが、多くの優秀な家臣が義元とともに討たれてしまった状況では今川家再興は不可能でした。その後、武田氏による駿河侵攻に際し、氏真は戦わずに遠江、伊豆、そして「早川殿」の実家である小田原城へと国を追われ逃走をすることになります。その逃避行は「早川殿」は輿ではなく徒歩だったと言われ、駿府に嫁入りした時との豪華さのギャップが哀れさを誘います。しかし、広大な領地を全て失った「早川殿」と夫・氏真でした。が：小田原城下の早川（この地名から早川殿と呼ばれています）の館で、夫婦仲睦まじく5人の子供をもうける事になります。

そして実家である北条氏が豊臣秀吉によって滅ぼされた後は、徳川家康の庇護のもと、浜松、京都、そして最後は江戸の品川に移り、そこで夫や徳川秀忠に仕えていた次男・高久などに看取られて波乱の生涯を終えました。

今宵はここまでということでは…。



亀姫

物語のお姫様と言えば「ワガママ」「自分勝手」「高飛車」というイメージを浮かべる読者も多いかもしれませんが：戦国時代に、それを地でいくお姫様が居ました。それが、征夷大將軍にまで上り詰めた徳川家康の長女「亀姫」です。

さて、この「亀姫」様ですが：16人もの子をもうけた家康の数少ない正室の子で、しかも長女ということで徳川家中でも別格の扱いをされていたようです。「亀姫」は駿河國（現在の静岡県東部）で永禄3年3月18日生まれ、没年は寛永2年5月27日とこれだけはつきりと記録が残っているのは珍しく、いかに大事にされていたかを物語っています。

蝶よ花よと育てられた「亀姫」ですが、嫁ぎ先は大名ですらない弱小の地方豪族の奥平氏の嫡男・九八郎でした。勿論、それには理由があり：武田勝頼との「長篠の戦い」の際に一万五千の武田軍に対しわずか五百の軍勢で長篠城に立てこもった奥平軍は最後まで奮戦し、結果的に織田・徳川連合軍を勝利に導いた恩賞として「亀姫」が降嫁されたのです。実際、この奮戦は軍功一として織田信長から「信」の字を許され「亀姫」の夫・九八郎は奥平信昌と名乗る

事になります。

その後の奥平氏はさしたる働きは無かったのですが「関ヶ原の戦い」で東軍に属しただけで美濃加納藩十萬石の大名となりましたが：これはもうどう考えても正室である「亀姫」様の威光が見え隠れしています。

「亀姫」は5人の子をもうけますが、生涯夫である信昌が側室を持つことを許さなかったそう、戦働きの無い息子である家昌にも下野國宇都宮十萬石の大名につけてしまふコトからも、弟である二代將軍・秀忠も頭が上がりなかつたコトが容易に想像できます。

しかしその後「亀姫」の娘婿である大久保忠常が早逝、その父・忠隣が失脚する事件が起き、それと前後して息子の家昌も国替えさせられた心労から亡くなつてしまいそれら全てに大久保氏の政敵である本多正純が関わっていると考えた「亀姫」は「宇都宮釣り天井事件」なる奸計で本多親子を失脚させてしまいます。

権力を持つ女の恨みは恐ろしいもので：ちなみに「亀姫」が住んだ美濃地方ではワガママな女性のことを「かめひめさま」と呼ぶ風習があるとか：今宵はここまでということで：。



小西マリア

戦国時代には、徳川家康がキリシタン追放令を出すまでキリシタン大名と呼ばれる洗礼を受けた戦国武将が数多くおり、その姫達にもキリスト教に改宗した者は少なくありません。そんなキリシタンなお姫様でもなかなか波乱に満ちた人生を歩んだ「小西マリア」という女性にスポットをあてたいと思います。

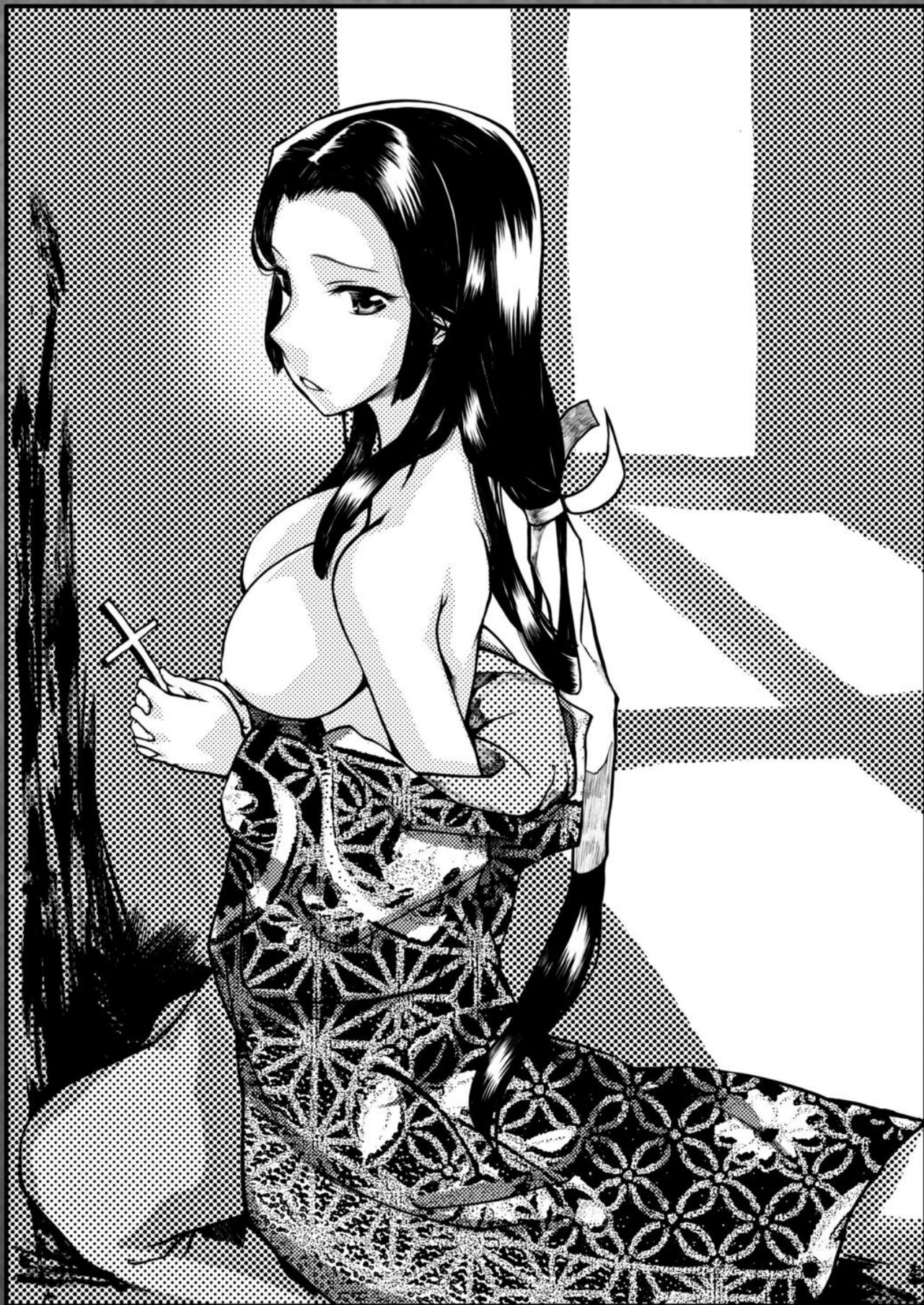
「小西マリア」こと小西妙は、豊臣秀吉の子飼いのキリシタン大名・小西（アウグスティヌス）行長の娘として生まれ、洗礼名「マリア」を名乗ることになります。「マリア」が年頃になった頃に：ちょうど日本は秀吉のもとに統一され、さらに「朝鮮」を通り「大明國（現在の中国）」に攻め入る野望を持っていました。そしてその尖兵として秀吉の指示を受けたのが「マリア」の実父・行長だった為、行長は朝鮮半島と九州の間に位置する対馬藩主・宋義智と娘の「マリア」を政略結婚させることで、朝鮮王朝に顔が利く宋氏に架け橋になってもらおうと画策します。

平和的に朝鮮半島を縦断して大明國に攻め入るという計画は結局頓挫し、戦端が開かれることになり父・行長と夫・義智は漢城（現在のソウル）を陥落させ一番のりを

するなど活躍したのですが、結局、撤退することになります。

そしてその後の「関ヶ原の戦い」で西軍は敗北し小西行長は斬首され、徳川家への帰順を示す為に宋氏はキリシタンでもある「マリア」を離縁し、対馬から追放してしまいます。そして長崎に渡った「マリア」は失意のまま三十という若さで病死してしまいましたが、実は義智との間に一人息子がおり、彼は「小西マンショ」を名乗り、母の死後にマカオに渡り、その後海路でアフリカ喜望峯からポルトガルの大学で神学を学び、さらにローマに渡って正式にイエズス会に入会し司祭となつて日本に戻つてきたという記録が残ってます。

ちなみに「マリア」が離縁された為に対馬は一時的に日本とのパイプが細くなつてしまった為、朝鮮国王の太宗が倭寇の再発防止という名目で対馬に軍勢を送り込み住人を殺戮し、次の国王・世宗と宋義智との間に「嘉吉条約」という日本を介さない不平等条約が結ばれるのですが：これが韓国の「竹島」帰属の根拠となっており、さらに対馬ですら韓国領という論調が度々出る原因となつていたりしますが：今宵はここまでということでは。



05

お市の方……やながわ理央

『漫画アクションピザッツ』2011年10月号（双葉社発行）掲載

07

千姫……もっちー

『漫画アクションピザッツ』2011年11月号（双葉社発行）掲載

09

細川ガラシャ……十六夜清心

『漫画アクションピザッツ』2012年1月号（双葉社発行）掲載

11

小少将……晴永牧兎

『漫画アクションピザッツ』2012年2月号（双葉社発行）掲載

13

おつやの方……肉弾丸

『漫画アクションピザッツ』2012年6月号（双葉社発行）掲載

15

立花閨千代……うめ丸

『漫画アクションピザッツ』2012年10月号（双葉社発行）掲載

17

里見種姫……庵ズ

『漫画アクションピザッツ』2012年11月号（双葉社発行）掲載

19

養徳院……辰波要徳

『漫画アクションピザッツ』2013年2月号（双葉社発行）掲載

21

寿桂尼……GADEN

『漫画アクションピザッツ』2013年6月号（双葉社発行）掲載

23

出雲阿国……十六夜清心

『漫画アクションピザッツ』2013年10月号（双葉社発行）掲載

25

春日局……迂闊十蔵

『漫画アクションピザッツ』2013年12月号（双葉社発行）掲載

27

如春尼……おかゆさん

『漫画アクションピザッツ』2014年6月号（双葉社発行）掲載

29

小野お通……中村博文

『漫画アクションピザッツ』2014年7月号（双葉社発行）掲載

31

お禰…やながわ理央

『漫画アクションピザッツ』2016年3月号（双葉社発行）掲載

33

井伊直虎…コア助

『漫画アクションピザッツ』2015年5月号（双葉社発行）掲載

35

今参局…中村博文

『漫画アクションピザッツ』2015年7月号（双葉社発行）掲載

37

阿波の小少将…十六夜清心

『漫画アクションピザッツ』2015年12月号（双葉社発行）掲載

39

山之手殿…ふじい 葛西

『漫画アクションピザッツ』2016年1月号（双葉社発行）掲載

41

三条の方…すずふう

『漫画アクションピザッツ』2016年8月号（双葉社発行）掲載

43

立原なみ…やながわ理央

『漫画アクションピザッツ』2016年5月号（双葉社発行）掲載

45

早川殿…うめ丸

『漫画アクションピザッツ』2016年6月号（双葉社発行）掲載

47

亀姫…尾山泰永

『漫画アクションピザッツ』2016年7月号（双葉社発行）掲載

49

小西マリア…よしじまあたる

『漫画アクションピザッツ』2016年8月号（双葉社発行）掲載

COLOR ILLUSTRATIONS

細川ガラシャ…十六夜清心













世界の 妖しい 美女たち



山咲まさと

&

ゲスト作家による

妖艶コラム

「アクションピザッツ」

(双葉社)にて

好評連載中!

戦国姫 LEGEND BEST SELECTION

2021年10月10日 発行

著 者 ■ 山咲まさと <twitter:m_yama_3>

発 行 ■ 電脳山咲組

※落丁・乱丁本のお取り替えは御遠慮下さい。

※著者ならびに発行元の許諾無く本誌の一部または全部を転載・複製・インターネット上に公開することを禁じます。

※未成年者の購入は御遠慮下さい。

2012, 2021: 山咲まさと / 双葉社 All rights reserved. Printed in JAPAN

※この書籍は電子版発行にあたり、「戦国姫LEGEND」「戦国姫LEGEND II」「戦国姫LEGEND III」を再編集したものです。

※やながわ理央氏は、2020年3月22日に御逝去されました。本誌はご遺族の許可をいただき、氏の作品を遺すべく配信しています。



電腦山味組